

▶「師弟百景」（井上理津子著、辰巳出版）

デジタル全能と言われる今も、「職人」と呼ばれる人たちがいる。師匠・親方とその弟子という生き方がある。本書では、庭師、釜師、仏師、染織家、左官、刀匠、江戸切子職人、文化財修理装飾師、江戸小紋染職人、宮大工、江戸木版画彫師、洋傘職人、英国靴職人、



硯職人、宮絵師、茅葺き職人という16の仕事の由来、作品と効能、そして、親方と弟子が共に過ごす人生が、活写されている。

各章の冒頭に師匠と弟子の写真と、それぞれの言葉が引用されているのがとても面白い。

「言ったって分かんないヤツは分かんないんだよ」という親方もいれば、「惜しみなく言葉で教えます」、そして、「職人という生き方も後進に伝えたい」という人もいて、今の親方たちもずいぶん変わってきている。

一方、女性5人を含む弟子たちは、親方の作品に感銘を受けて飛び込んで来たという人が多い。これは、熟練の職人の作品の伝える力を、真っすぐに受け取る若者たちの存在を示している。時代を超えて伝え、伝わっていく希望の連鎖だ。

最後に私が感銘を受けた仏師の言葉で締めくくりたい。「一片の木片が、千年の歴史を作る」